



創刊50号記念 ● “日体大の今”と“スポーツ文化の風”を発信し続けてきた『学報 NITTAIDAI』の軌跡

学報 NITTAIDAI Special 50





『学報 NITTAIDAI』の創刊号は、2000年11月に発行された。同年に開催されたシドニー五輪が特集として扱われ、田村亮子、田島寧子、永田克彦、高山樹里の各メダリストの記事が掲載されている(※姓は当時)。

さらに巻頭では、塔尾武夫学長、西田豊明広報委員長(※ともに当時)が、創刊にあたっての思いや本誌の使命を述べている。学内のコミュニケーションツールとしての役割を担うとともに、「スポーツを愛する学内外の人々との＜新しい出会いの場＞を創造し、スポーツ文化の風を発信していきたい。」そのコンセプトは50号を迎えた今日でも変わらない。

この間、北島康介、中村礼子、外村哲也、沖口誠らのアスリートが表紙を飾るなど、輝かしい戦績と日体大のアイデンティティを伝えてきた。また、東京・世田谷キャンパス再開発工事の竣工、および児童スポーツ教育学部、保健医療学部、スポーツ文化学部等の開設など、進化する日体大の今を発信してきた。

そして、近年多く掲載されるようになった話題は国際交流、社会貢献に関するものだろう。「スポーツは、世界共通の人類の文化である」という前文から始まるスポーツ基本法が施行されたのが2011(平成23)年である。こうした流れや、加速するグローバル化の影響を受けて、スポーツに対する期待がますます多様化してきた。東日本大震災では、いのち、人々の絆の大切さを私たちはあらためて実感した。スポーツと日体大が担う役割がますます大きくなっているのは言うまでもなく、これからも『学報 NITTAIDAI』は日体大のさまざまな挑戦を伝えて、地域社会や世界と日体大をつないでいく。

同時に、学内外の関係者の方々に、一人ひとりの心の原点として本誌を読み、日体ファミリーの絆を深めていただきたいと思う。50号を迎えたことを感謝申し上げるとともに、今後とも期待と応援をいただければ幸いである。

日体大のアイデンティティと進化をこれからも伝え続けていく

創刊50号を迎えた学報NITTAIDAIを振り返って

学報NITTAIDAI歴代担当者のメッセージ
～広報誌への思いと今後の期待を込めて～



言えどせむうんハタス夫。
大学改革推進室 室長
西本 幸嗣



副学長先生、歴史、資料集
アドミッションセンター副センター長 兼事務長
忠政 明彦



大切な学内広報ツール
本学は3つの支所で活動中！
学生支援センター学習支援部門 事務長 兼部門長
菊名 博之



学内報である
大学改革推進室 室長補佐
三戸 和明



日体大の顔
広報課 主任
山本 貴代志



スタートライン
日体大で「夢」をかなげたい方へ！
私たちがあなたに何を伝えたいのか！
学生支援センター学習支援部門
三村 信

学報 NITTAIDAI 50号 2017. AUTUMN

Special Contents

- 03 **アスレティックデパートメント
座談会**
- 11 スポーツで社会にイノベーションを
**スポーツマネジメント学部
2018年4月開設**
- 12 時代と社会の要請に
最先端の研究・教育で応える
**2018年 日体大学院が
さらに進化する**
保健医療学研究科・
保健医療学専攻を開設
体育科学研究科
「コーチング学専攻」

Next is us

日体魂を受け継ぐ者

- 13 **NASSの挑戦**
女性特有の課題に対応し、
競技力向上を目指す
女性アスリートサポート
- 15 **Next is us
日体魂の聖火リレー**
～日体魂を受け継ぐ者～
第2回 的を狙うことそのものが楽しい。
自分流、自然体で、世界の高みを目指す
河田悠希選手（アーチェリー）
- 17 東京オリンピック・パラリンピックまで
あと1000日。熱き日体魂の誓い
- 18 第29回ユニバーシアード競技大会で
本学学生・関係者が健闘

学報NITTAIDAI（ニツタイダイ）50号
発行日●2017年11月2日
発行●日本体育大学広報委員会
TEL 03-5706-0948
FAX 03-5706-0922
<http://www.nittai.ac.jp/>
制作協力●（株）図書出版

日体大のスポーツ推進の中核を担う アスレティックデパートメント始動

～新組織を率いるプロフェッショナル達が語る展望～

日体大は「来たる2020年東京オリンピック・パラリンピックにおいて70名の学生及び卒業生を
オリンピック・パラリンピアンとして輩出」することを目標に掲げている。

さらに、東京オリンピック・パラリンピック後も見据えて、
永続的にトップアスリートの輩出と社会貢献を果たしていかなければならない。

その目的を達成するべく本年4月に、日本の体育・スポーツ界において、
中心かつ主導的役割を担ってきた日体大の次代に向けた革新的な施策を実行する組織として
「アスレティックデパートメント(AD)」が開設された。

座談会では、ADの概要や狙い、日体大ならではの強みや特徴、今後の展望を関係者に聞いた。

座談会出席者



佐野 昌行 准教授

アスレティックデパートメント長補佐

(さの まさゆき) 体育学部社会体育学科准教授。アスレティックデパートメント長補佐。日本体育大学社会貢献推進機構地域社会貢献活動委員。スポーツ・アドミニストレーターとして社会貢献活動、スポーツ教育活動、スポーツボランティア活動の企画・立案・運営コーディネートなどを行う。専門はスポーツマネジメント、スポーツマーケティングなど。



岡本 孝信 教授

アスレティックデパートメント長補佐

(おかもと たかのぶ) 体育学部健康学科教授。アスレティックデパートメント長補佐として、アスレティックデパートメントの競技力強化支援部門を中心に各部門の事業を推進する。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。専門は運動生理学。動脈伸展性を指標としたアスリートの新たなコンディショニング法の開発を進めている。



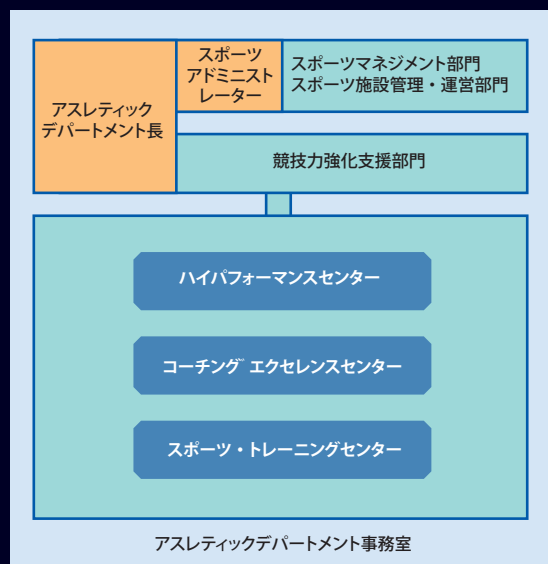
山本 博 教授

アスレティックデパートメント長

(やまもと ひろし) 体育学部社会体育学科教授。アスレティックデパートメント長。中学校3年生で全日本アーチェリー選手権大会に出場。高校では全国高等学校総合体育大会で3年連続優勝。オリンピックでは1984年の第23回ロサンゼルス大会銅メダル、2004年の第28回アテネ大会で銀メダルを獲得。単一競技でのオリンピック5回出場を果たす。

アスレティックデパートメントとは

平成29年4月1日発足。「①全学で統一した競技力強化支援体制を構築し、学生競技者の資質向上と競技成績に結びつける」「②日本版NCAAの創設に向けた体制を構築し、適切な組織運営管理及び大学スポーツビジネスの確立を目指す」ことが目的。これまでのスポーツ局やNASS(日体大アスリートサポートシステム)の組織と機能を統合するとともに、スポーツマネジメントやコーチ育成の機能を追加し、本学のスポーツ推進の中核を担う。



伊藤 雅充 教授

コーチングエクセレンスセンター長

(いとう まさみつ) 体育学部体育学科教授。コーチングエクセレンスセンター長。コーチに対する能力向上を目的とし、広い視野を有した専門性の高いコーチ育成を支援する。同時にアスリートに向けてもコーチングの指導を行う。東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系修了。専門はコーチング、コーチ教育。



大本 洋嗣 教授

ハイパフォーマンスセンター長

(おおもと ようじ) 体育学部体育学科教授。ハイパフォーマンスセンター長として、アスリートのパフォーマンスを最大限に引き出す強化を担う。2016年リオデジャネイロオリンピックでは水球日本代表監督として32年ぶりのオリンピック出場を果たす。日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了。現JOCナショナルコーチ。日体大水泳部部长・水球ブロック監督。



西山 哲成 教授

スポーツ・トレーニングセンター長

(にしやま てつなり) 体育学部体育学科教授。スポーツ・トレーニングセンター長。トップアスリートの競技力向上、さらにはスポーツ科学理論、およびトレーニングに関する実践と研究の拠点となる同センターの管理運営を統括する。専門はスポーツバイオメカニクス、スポーツ生理学など。

知と実績を 結集させたチャレンジする組織

岡本孝信 本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。私は司会をつとめますアスレティック・パートメント（以下AD）長補佐の岡本孝信です。皆さま、よろしく願います。

日体大は東京オリンピック・パラリンピックに向けてさらなる競技力向上が大きなテーマとなっています。本年4月に開設したAD及び各センターはその大きな役割を担う組織であり、大きな期待が集まっています。そこでそれぞれの活動の中心を担う先生方にお話を聞きたいと考えています。

まずはAD長の山本博先生に、設立の経緯や役割についてお話いただければと思います。

山本博 ADの前身のスポーツ局が2000年のシドニー五輪のときに発足しました。スポーツ局はオリンピックに出場する選手を数多く輩出し、メダルを獲得する選手を育成するなど、日体大の選手強化を一手に担ってきました。そのスポーツ局が17年間活動し、今回ADに進化しました。

ADの第一の目標は東京オリンピック・パラリンピックに卒業生を含めた日体大の関係者70名が出場できるようにすることです。そ

の選手強化の基盤となるのが今回開設されたスポーツ・トレーニングセンター、ハイパフォーマンスセンター、コーチングエクセレンスセンターの3センターとなります。ここでは、スポーツ局が持っていなかった機能が加味され、より充実した組織となりました。ADの発足により、本学が日本の学生スポーツのトップリーダーだからこその体制の強化が実現し、さらに横のつながりのある最も充実した組織になったと自負しています。

岡本 それでは、大きな役割を担うことになる3センター長に各センターの特徴や、今後どのような取り組みをするかについてお話いただければと思います。

大本洋嗣 ハイパフォーマンスセンターは、トップアスリートに特化して最先端の医学科学を用いたサポートを実施します。ここではトレーニングに際してさまざまなデータを測定し、そして得られたデータを蓄積してデータベースを構築し、将来の強化へつながるものにします。

まずは近々重点強化種目が決まるので、それらの種目のアスリートにヒアリングを行い、どういうサポートや強化ができるかのグランドデザインづくりを進めます。





山本 博 教授

アスレティックデパートメント長

多くの人に
日体大サポーターになってもらい、
スポーツの素晴らしさと感動を共有する。

伊藤雅充 コーチングエクセレンスセンターはコーチが能力を伸ばしていくための支援センターです。コーチはアスリートへの指導に専念するあまり、自身の能力を伸ばすための学びの機会が少ないのが事実です。

また、コーチ自身が学ぶ姿勢を見せることもアスリートの指導につながると考えています。コーチ自身が学ぶ姿勢を見せ、学び方を教えるのも重要な任務で、コーチが常に学び続けることはトップアスリートを育成するうえにおいても重要です。

西山哲成 スポーツ・トレーニングセンターの役割の一つはトレーニング場所の整備です。東京オリンピック・パラリンピックが近づいてくると学外からも日体大の施設を利用したいという要望も出てくると考えられます。その要求に見あう施設に整備しレベルアップすることを目指しています。もちろん、日体大のアスリートが使いやすい、充実したトレーニングができるようにするのは大前提です。

またスポーツ医学のエビデンスに基づいた新しいトレーニング環境も提案していきたいと思っています。そのことが2020年の東京オリンピック・パラリンピックの先も見据えた将来に渡り活用できる資産になると考えています。

岡本 3センター長にお話を聞きしましたが、ADは競技力向上だけでなく、さまざまな事業を展開します。その事業はスポーツ・アドミニストレーターを中心に行われますが、スポーツ・アドミニストレーターの役

割について佐野先生にお話しいただければと思います。

佐野昌行 スポーツ・アドミニストレーターは日本全体のスポーツ振興、そしてスポーツ庁の大学スポーツ振興の構想の中から配置が決まりました。2016度から大学スポーツの振興に関する検討会議が開かれており、2017年度からは大学スポーツ全体が変わろうとしています。

そのなかで競技力向上だけでなく、社会に向けて大学のスポーツ施設の開放、アスリートのセカンドキャリア支援、大学スポーツの収益力向上、地域や社会への貢献事業、ボランティア活動の企画など、さまざまな役割があり、非常に多岐にわたる計画があります。それらがすべてスポーツ・アドミニストレーターの領域となるのです。

現在は、これまでの活動についての調査、今後の課題や事業計画などを研究しています。

岡本 ありがとうございます。それぞれに役割や取り組みについてお話いただきました。ADは、山本先生のお話のように東京オリンピック・パラリンピックへ本学の関係するアスリート70名を出場させることを第一の目標に、本学の各組織がこれまで以上に有機的に連携していく取り組みであることがおわかりいただけたと思います。



岡本 孝信 教授

アスレティックデパートメント長補佐

日体大の持つさまざまな知と
科学の英知を融合させ、
未来を切り開いていく。



可能性のあるアスリートを あまねく伸ばす

岡本 それでは東京オリンピック・パラリンピックに70名を出場させるために、現在、どのようなことに取り組んでいるか、また今後どのようなことができるかなどについて、お聞きしたいと思います。

山本 東京オリンピック・パラリンピックはもう間近に迫った大会です。まず出場が可能なアスリート、そしてもう少しで出場できるアスリートは誰かをピンポイントで捉えることをします。さらに出場できるアスリートには、どうすればメダルが取れるか、ボーダーにいる選手をどうするか、アイデアを出し合っていくきます。本学だけでなく、各スポーツ連盟や日本スポーツ振興センター（JSC）など、さまざまな機関が強化に取り組んでいますが、アスリートである学生が多数在学する日体大がサポートすることは、教育機関としても非常に重要だと考えています。そのため知を集めなければなりません。

伊藤 今年度すぐに行ったのはコーチが何を望んでいるか、どういう能力を伸ばしたいと考えているかについてのヒアリングです。それに基づきメディア対応のセミナーを行いました。自分のインタビュ対応を向上させることで、コーチのアスリートへの話し方も改

善されます。また、勝った時、負けた時に自分の価値をメディアにどう伝えるというトレーニングにもなります。コーチがアスリートへ何をどのように伝えるかで、トレーニングの質も成果も大きく変わっていくと考えられます。

岡本 昔はコーチングというと上下関係が強く、それをもとに指導していたこともあったと思いますが、最近のコーチングはいかがでしょう。

伊藤 今、コーチングは一方通行ではなく、双方向が謳われています。時代が変わりアスリートも変わっていくので、常に新しいコーチング手法を身に付けなければなりません。今は上下関係でなく、中身や言葉使いで指導するコーチがより重要になっています。

西山 私はトレーニングセンターは実践と方法論の研究拠点だと考えています。実践の観点からいうと、日体大アスリートサポートシステム（NASS）が2014年に発足し、今年度では21の運動部がトレーニング指導を受けています。NASSはトレーニングメニューをつくったり、メディアカルサポート、モチベーション維持のためのサポートも行っています。さまざまな分野の専門の先生が在

A t h l e t i c D e p a r t m e n t





佐野 昌行 准教授

アスレティックデパートメント長補佐

広く社会とコミュニケーションをとり、
日体大から新たな価値を生み出していく。

籍し、アスリートの可能性を最大限に発揮できるような知見を提供できるので、NASSは非常に価値の高い存在です。

大本 これまで強化に関してはクラブがその役割を担っていました。そこで強い選手が出てきて、その選手が国内競技連盟の目に留まり強化されオリンピックに出場するということが多くありました。今後はクラブ任せではなく、NASSが中心となって優秀な選手を勧誘し、引き上げていくことも役割の一つだと思います。

また、ADが発足したことで、超トップアスリートでなくてもトップアスリートに近づけていくことができると思います。トップアスリートでないとサポートを受けることができず、全部自力で何もかもやらなくてはならないのが現状です。そうであると可能性のあるアスリートの芽が摘まれてしまいます。それをNASSができたことで可能性のあるアスリートがサポートを受け、競技力が向上していくと確信しています。私は水球を指導していますが、NASSのサポートを受け、ゲーム分析の労力が軽減され、2016年リオデジャネイロオリンピックで32年ぶりにオリンピックに出場することができました。3センターの知恵やサポートでさらなる充実した展開ができるのではないかと期待しています。

そこで一つ提案をしたのは、これまでチームに予算を付けていたのを、可能性のある選手個人に厚くサポートするというものです。

個々の力が上がることで結果的にチームの底上げになると考えています。

岡本 これまでも一定の成果が出ているので、これまで以上のものを追求するとさらなる施策が必要です。そういう意味でもADが発足し協力しながら進めていくことは大きな意味があると思います。ここで何度か出てきたNASSについて詳しくお話いただきましたと思います。

西山 NASSは2013年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることが決まり、それに向けて翌2014年に発足しました。マルチサポートシステムと題して大学全体の能力を結集させようという考えでスタートしました。NASSはアスリートの現場で仕事をするNASS助教というメンバーが大きな役割を果たしています。実績の点では2016年度はトレーニング指導やメディカルチェック、心理カウンセリングなどさまざまな領域のサポートを行いました。その数は1067件に上ります。実に多くのアスリートが利用しているかが分かります。NASSは今年度からパラアスリートの領域も追加されサポートしていくので、東京オリンピック・パラリンピックに向けてさらにパワーを結集させていこうと考えています。

岡本 このようにNASSやADの取り組みは革新的なものであり、今後も期待したいと思います。



西山 哲成 教授

スポーツトレーニングセンター長

実績を誇りに、実践と科学の融合により、
日体大のスポーツを新たな段階へ誘う。

地域社会に貢献し 日体大サポーターを増やす

岡本 これまで競技力強化を中心にお話をお聞きしてきました。強化のためには優秀な人材を獲得することも大事です。それでは選手獲得のスカウティングについてお聞きします。

山本 優秀な人材を勧誘するというのもとても重要なことです。優秀な人材には日体大入学前でも強化指定選手に仮認定できるようなルールを変更しました。また、スポーツ専門職が配置されていないクラブの先生方がリクルーティングに行く際の予算も計上しました。こうして入り口の強化をしています。

大本 入学1年前でも強化指定選手に仮認定してサポートできるのは非常に有効です。ただ、高校生などにどれだけ「投資」をするかうまくバランスを取る必要があると思います。

西山 日体大はJSCが行うナショナルタレント発掘・育成プログラムに協力しています。これはアスリートの適性を調べて、そのアスリートにあった競技に出場機会を提供するというものです。日体大が多く優秀な人材を抱えていることは言うまでもありません。これまでに陸上の君嶋愛梨沙さんがボブスレーでワールドカップに出場するという成果も上

げています。今後、この手法は大いに有効であると考えられます。

岡本 ADとしては、アスリートの学業支援や競技を終えた後のサポートも重要であると思いますがいかがでしょう。

伊藤 学生アスリートは将来コーチになることも考えられます。そのため、アスリートの段階からコーチングのスキルを身につけるセミナーも開催しています。

大本 ハイパフォーマンスセンターは、トップアスリートのサポートをしています。数多くの人手が必要になります。そこで、学生には勉強ということを含めてサポートのお手伝いをしてもらっています。トップアスリートのサポートができるのは非常に貴重な機会です。これは日体大の最大の特徴の一つで、将来スポーツを支える人材や研究者を目指す人にとつても経験値を高めるよい学びの場であると考えられます。また、一流アスリートとしての振る舞い方についても指導しています。

岡本 アスリートとして一流を目指すしつづ、人としても一流を目指すということですね。

佐野 キャリア支援に関しては、アスリートキャリアアドバイザーがすでに導入されています。これは海外を転戦するアスリートに個





大本 洋嗣 教授

ハイパフォーマンスセンター長

科学的かつ効率的な トレーニングを提供して、 アスリートを次のステージへ導く。

別に対応した学習支援をするものです。またオンデマンドで授業を受けることもできます。これはアスリートに限らず、一般学生も受講可能なもので、このシステムは広く周知したいと考えています。

さらに日体大にはトップアスリートとして活躍したOBがたくさんいるので、そういう方々に講演をしてもらったり、ワークショップを開催してもらうことも考えています。大学の先輩として、自分の特性を活かした将来像を描いていく大切さを伝えてもらうものです。

岡本 では最後に日体大のブランド力を高めるためにはどうすればいいかについてお話いただければと思います。

伊藤 スポーツの価値を高める中心的役割を果たすのはコーチであると考えています。コーチの振る舞いがスポーツの価値を位置づけるところもあります。そういう意味でも世界をリードするコーチを育成することがブランド力を高めることになると考えています。

大本 日体大が教育サポーターのあり方を変えていくことも重要です。例えばアメリカではアスリートの練習時間確保を考慮し、優先的に履修申請ができるシステムになっています。そういうシステムを導入するのも一案です。つまり、日体大が日本で一番練習環境がよい大学となるのを目指すことが重要であると考えます。

佐野 日体大のブランドを高めるためには社会との接点やつながりをたくさんつくり、コ

ミュニケーションの数を増やすことで認知度を高め、日体大の価値を知ってもらうことが重要だと思っています。企業や団体との連携を強化し、新しい価値を生み出し、大学スポーツ事業の推進につなげていきたいと思っています。

西山 大学の英語名がNSSU (Nippon Sport Science University) とスポーツとサイエンスであり、科学と実践が融合した大学を体現すべきであると考えています。大学にあるすべての科学と知を融合させるのがそのまま日体大のブランド価値向上につながると思います。

山本 今回発足したADの存在自体が日体大のブランド価値を高めるものだと思っています。新しい提案がされたときに立ち止まらずしっかりと具現化していき、冒険であっても新たなチャレンジをする組織にしたいと思っています。そして一般学生にもADの活動に興味を持ってもらうことも重要です。そのうえで地域貢献としてキャンパスのある東京都世田谷区や横浜市青葉区の人たちに日体大のサポーターになっていただきたいと強く思います。今後生まれるキャラクターの入ったTシャツを着た人たちに試合会場に来ていただき、共に日体大を応援する。学内外が一つになってコミュニティができるのが夢です。

岡本 今日のお話で、日体大のADの未来がますます楽しみになりました。本日はありがとうございました。



伊藤 雅充 教授

コーチングエクセレンスセンター長

コーチは常に学び、 世界一のコーチを目指すことが、 世界一のアスリートを生み出す。

スポーツで社会に新しい価値を創造する スポーツマネジメント学部 2018年4月開設

社会におけるスポーツの価値について学び、スポーツ産業の発展と豊かなスポーツライフの実現に資する人材を育成する。

2011年(平成23年)公布の「スポーツ基本法」や2015年(平成27年)設置の「スポーツ庁」はスポーツを国家戦略として位置付け、スポーツの振興を図る方針を明らかにしました。少子高齢化時代における人々の心身の健康の保持増進、地域社会の人的交流の再生、スポーツ産業による新たな需要や雇用の創出など、スポーツへの社会的期待はますます多様になっています。こうした時代の要請に応えて、スポーツの経済価値や公共財としての機能を、ビジネスや公共サービスとして拡大し、地域社会の活性化に資する人材を育成するためスポーツマネジメント学部を開設します。



スポーツ マネジメント学科

スポーツに関する歴史や社会学、政策や法律、経済や経営の知識を修めた上で、ファンリティ(施設)、レジャー、イベントなどの経営について学び、スポーツ産業のさまざまな領域を広く理解します。さらに演習や実習科目を通して、スポーツビジネスの現場で思考・行動するリーダーとしての能力を養います。

POINT

1. スポーツマネジメントの理解

世界中ではスポーツイベント、スポーツ用品、スポーツ施設、プロスポーツ、スポーツメディアなどに関わる様々な事業が広がりをみせています。こうしたスポーツ事業に関わるスポーツをマネジメントし得る人材に求められている知識や技術を「スポーツマネジメント論」「スポーツ産業論」「スポーツビジネス論」「スポーツマーケティング論」などといった基幹科目で習得します。

2. スポーツ産業をリードする人材の育成

我が国ではスポーツ市場を拡大してスポーツの成長産業化をめざしており、このために新たなビジネスを創出できる人材が求められています。「ファンリティマネジメント論」「メガスポーツイベント論」「レジャーマネジメント論」などといった展開科目でスポーツをビジネスの関連からマネジメントできる能力を養います。

3. スポーツビジネスの現場実習

スポーツマネジメントの理論を実践的に活用する能力を身につけるために「スポーツビジネス現場演習」「スポーツビジネス現場実習」といった演習・実習科目を設けています。スポーツビジネスの現場での体験を通して自ら課題を発見し解決策を検討します。併せて、卒業後の自らが目指す姿を明確に認識することにもつながっていきます。

【将来の進路】 スポーツ関連企業、プロスポーツ関係、スポーツ団体、スポーツ行政、各種スポーツクラブ、中学校・高等学校教諭(保健体育) 他

[習得すべきスキル]

企画立案能力

多様な需要に対して、問題を深く考察し新たな視点や柔軟な発想による企画を立案できる。

組織運営能力

計画などを実行するために適切な組織をつくり、組織の機能の最大化を図れるような適切な運営ができる。

課題解決能力

活動の結果と過程の評価から課題を把握し理論的に分析することで解決策を立て、次の活動にフィードバックすることができる。

実技能力

ライフステージに応じたスポーツ活動を推進することができる。

スポーツ自体の マネジメント

スポーツライフの マネジメント

スポーツをマネジメントする 知識と技術



スポーツライフ マネジメント学科

スポーツに関するマネジメント論や社会学、哲学や歴史、公衆衛生や福祉などに関わる知識を修めた上で、野外教育やレクリエーション、障がい者スポーツやまちづくりなどについて学び、さまざまなスポーツライフを理解し、生涯教育の一環として一般市民に向けたスポーツの普及・拡大や健康増進を図れる能力を養います。

POINT

1. 地域の健康増進を支援

生涯にわたり心身の健康を維持・増進する生活を、老若男女や障がいの有無を問わず、すべての人に提供するための知識と技術を身に付けます。さらに、健康スポーツを広める制度策定や環境づくりを促進し、健常者や障がい者、高齢者など、それぞれのライフステージに応じたスポーツを実社会で企画・指導できる能力を養います。

2. コミュニティの形成

地域社会においてスポーツが持つ公共性や求心力を最大化し、スポーツを核として地域住民が相互関係を築けるコミュニティの形成を推進できる能力を養います。高齢化社会を迎えた日本において、国が提唱する「総合型地域スポーツクラブ」など、スポーツを通して充実した第二の人生を送る場を支え、社会貢献を果たします。

3. 健康スポーツを牽引

健康を目的としたスポーツに多くの人が親しめるよう、レクリエーション活動やリズム体操などライフステージに応じた運動を企画・実践するとともに、それを自ら牽引できるよう、さまざまなスポーツや運動の技量を高めます。こうした技能を持ってコミュニティに加わり、地域における生涯教育の指導者としての役割を果たします。

【将来の進路】 地域スポーツ指導者、中学校・高等学校教諭(保健体育)、社会教育主事、各種公務員、各種スポーツ団体、一般企業 他

時代と社会の要請に最先端の研究・教育で応える 2018年 日体大大学院がさらに進化する

日体大は、スポーツへの期待の多様化に合わせて研究・教育体制の充実を図ってきた。また、国際スポーツ人材育成拠点NSSU Coach Developer Academy(コーチ育成者養成アカデミー)等による国内外に向けた人材や知見の交流も積極的に展開している。こうした取り組みをさらに進化させるため、大学院研究科(博士前期課程・博士後期課程)の改革を推進する。スポーツ、教育、健康等の領域に高い志を持つ人はぜひ門を叩いてほしい。

～整備医療の教育・研究、救命処置と災害医療の研究・教育できる人材を育成～

保健医療学研究科 保健医療学専攻を開設

(2018年4月開設)

2014年に開設された保健医療学部の実績を踏まえ、現代医学に精通し、施術所での問題解決能力や安全管理能力、コミュニケーション能力に優れ、科学的根拠に基づく高度の臨床技量を有する臨床現場の指導者や柔道整復の教育者・研究者と、高度な医学知識に基づく臨床能力を有し、病院前救命処置と災害医療分野の研究・教育を実践できる人材を育成することを目的とする。

高度実践柔道整復師コース

「高度の臨床技量(柔道整復術)を有する臨床現場の指導者」および「柔道整復師養成施設(大学)等の教員(柔道整復の教育者・研究者)」を養成する。(入学者は柔道整復師の有資格者(取得見込みを含む)であることが必須)

<高度実践柔道整復師とは?>

- 研究者としての資質：整備医療分野とその関連領域の高度の専門知識を有し、問題を解決するための研究手法を理解できる。
- 科学的根拠に基づく柔道整復術：骨・筋・関節などいわゆる運動器外傷に対する高度の医学知識とその臨床応用能力、臨床的技量(柔道整復術)を持つ。
- 臨床家としてのプロフェッショナリズム：国民の健康維持と増進の一翼を担っている自覚と品格、倫理観を持ち、臨床現場において科学的根拠に基づく治療法を実践できる。
- 臨床現場での指導力：研究成果を臨床現場に還元・応用でき、臨床現場の指導者としての資質を持つ。

救急災害医療学コース

研究・臨床・教育を通じて科学的根拠に基づき指導ができる人材を育成する。

<指導的立場の救急救命士とは?>

- 研究者としての資質：救急・災害医療分野とその関連領域の高度の専門知識を有し、問題を解決するための研究手法を理解できる。
- 救急・災害医療システムの構築：科学的根拠に基づき、救急・災害医療体制を検証するために、高度な専門知識と臨床能力を持つ。
- プロフェッショナル・オートノミーの確立：社会の変化に対応し、救急救命士として生涯学び続ける医療人としての倫理観を習得する。
- 臨床・教育現場での指導力：研究成果や多様な救急現場の経験を、所属する臨床現場に還元・応用でき、臨床現場の指導者としての資質を持つ。

～新しい時代を創るコーチングの研究拠点～

体育科学研究科に 「コーチング学専攻」を開設

(2018年4月開設)

これからの時代のコーチには、新しい時代にふさわしいコーチングの理論と方法を自ら生み出していく能力の育成やコーチ育成者としての資質の向上、さらに国際的な視野に立ってコーチングの在り方を問い、革新していくことが求められている。これらを踏まえ、コーチング学専攻では、コーチング学に関する高度な学術研究を通して、これからのスポーツコーチングの在り方を提案し、自ら実践していく人材を養成する。さらに、研究や教育活動を通して、コーチング学の発展と人類の友好・親善に貢献することを目指す。

特 徴

○「スポーツ・フォー・トゥモロー」のレガシーを後世に伝える

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた国際貢献策である「スポーツ・フォー・トゥモロー」プログラムの一環として本学が運営する国際スポーツ人材育成拠点NSSU Coach Developer Academy(コーチ育成者養成アカデミー)で蓄積したノウハウの継承。

○「反体罰・反暴力宣言」を推進する方法の提供

本学の「反体罰・反暴力宣言」に則り、科学的なエビデンスに基づいたコーチング実践について学習、研究を行い、スポーツのインテグリティを高めていく取り組みを実践。

○コーチングのモデル・コア・カリキュラムの導入

本専攻のカリキュラムはグッドコーチを育成するための「モデル・コア・カリキュラム」の内容を反映させ、グッドコーチ、エキスパートコーチを育成。

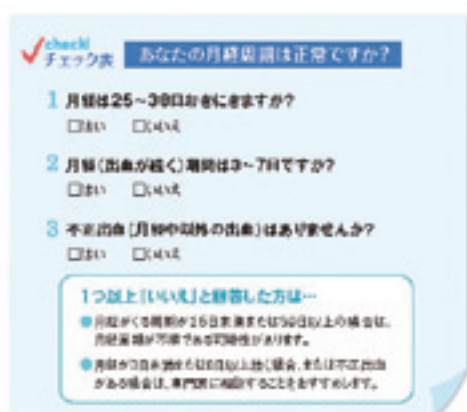
東京オリンピック・パラリンピック開催まで約1000日。日体大は今年度新たに「アスレティックパートナー」を始動させるなど、競技力強化に向け体制のいっそうの充実を図っている。

「日体大アスリートサポートシステム（NASS）」は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会において「70名の学生及び卒業生をオリンピック・パラリンピアンとして輩出」することを目標に掲げ、各種専門的サポートを展開している。その中で今回紹介するのは「女性アスリートサポート」だ。この領域は、平成25～27年度、平成29年度～現在にかけスポーツ庁委託事業「女性アスリートの育成・支援プロジェクト」が実施されており、その先進的な知見がプログラム構築等に活かされている。

国際舞台での女性アスリートの活躍がますます期待されている。一方で、女性アスリートに生じる特有の健康障害が問題となっており、国際的にも解決すべき重要課題として取り上げられている。異常を放置したままトレーニングを続けられ、競技力が向上しないばかりか、人生設計にも影響しかねない。この記事を読み、女性のからだの問題について理解を深めてほしい。

NASSの挑戦 第6回

女性特有の課題に対応し、競技力向上を目指す 女性アスリートサポート



引用元 <http://www.nittai.ac.jp/female/reports/index.html>



日本体育大学では平成25～27年度、平成29年度～現在にかけ、スポーツ庁委託事業「女性アスリートの育成・支援プロジェクト」を展開。左の写真は同プロジェクトの「月経周期を考慮したコンディショニング法の開発」の成果として発行されたパンフレット。月経周期の解説や、簡単なチェック表、タイプ別の月経周期によるコンディション変化やアドバイスなどが掲載されている。以下サイトからダウンロードが可能。

<http://www.nittai.ac.jp/female/reports/index.html>

月経周期によるコンディションの変化は一人ひとり違う、個人内でも変動する

女性の月経周期は、ここところからのコンディションに変化をもたらす。パフォーマンスに大きく影響を及ぼす可能性がある。こうした女性特有の課題について、最近ではアスリートの理解も深まりつつある。

現在「女性アスリートサポート」では、啓発のためのセミナーを中心に活動を行っている。その中心となるのは、月経などについて正しい知識を習得するとともに、自分自身のからだを徹底的に向き合うことだ。

女性アスリートの健康上の問題として、「利用可能なエネルギー不足」「無月経」「骨粗鬆症」があり、これらは「女性アスリートの三主徴」と呼ばれている。このうち無月経は、月経が3か月以上停止している状態とされる（正常な月経周期は25～38日）。また、月経が正常であっても、月経困難症（月経中に起こる下腹部の痛みや腰痛など）や月経前症候群（PMS≡Premenstrual Syndrome、月経前3～10日に続いて見られるこころやからだの不調などの症状が見られることもある。こうした自分のからだの仕組みやタイプなどを理解することによって、予防・改善につなげ、痛みを我慢することなく、100%の力を出してトレーニングに取り組むことができれば、効果が上がることは言うまでもない。

かつては、月経をあえて気にしなかったり、他人に話すことを憚ったりする風潮があったことも確かだろう。しかし、女性アスリートサポートのセミナーでは、悩みをフランクに話せる場や、骨密度測定など客観的にチェックできる機会を提供している。大切なのは、月経周期によるコンディションの変化は個人差が大きく、なおかつ個人内変動が大きいということだ。まずは

セミナーで講義や他者の話を聞いたり、チェックを受けたりすることで、自分の状態や傾向を正確に理解してほしい。

アスリートでない学生も、指導者も理解を深めてほしい

月経異常と正常月経の人の割合を見ると、団体大では約70%が^{※1}、国内のトップアスリートでは約60%が正常というデータがある^{※2}。意外と正常な人が多いと言えるが、一方で正常な人



カヌー、スキー、テニス、トランポリン、バドミントン、フェンシング(近代五種)、ボクシング、ラグビー、柔道、新体操などの各部を対象にサポートを展開している。

健康な状態でトレーニングに臨むことが、競技力向上に必要であることを理解してほしい。

月経があることは健康な証拠であり、成人の女性として、体が整っている状態、子どもが産める状態である。アスリートも運動をしていない学生も、健康や妊娠出産は人生の重要な問題であり、リスク回避のためにも月経周期について正しく理解しておく必要がある。不安や悩みがあれば、チェックを受け、問題があればためらわず婦人科を受診することが推奨される。さらに、女性アスリートばかりでなく、指導

の中でも約80%が月経によるコンディションの変化を感じていると回答している^{※1}ことから、やはり関心の高い問題であることは確かだろう。

月経は、初潮から閉経までの約40年間、毎月繰り返されるものである。従って「今だけ、我慢すればよい」というものではない。もし、月経時に痛みが強い場合や月経前の不調に困っている場合には、専門家に相談すべきである。

無月経は、脳でのホルモン調整が低下することによって起こる。このような場合には、運動中のホルモン分泌も異常となる可能性が高い。

女子が月経周期に関心をもってくれていることは頼もしく、喜ばしいことだ。

女性アスリートサポートの活動は、女性アスリートが健康であることはもちろんだが、その先のピークパフォーマンスを追求して、環境を整えていくことが目標だ。その点において、アスリートだけではなく、トレーナーやマネージャーとして、専門的知識を踏まえてサポートしていくなど、さまざまな貢献のスタイルが想定される。そして最も期待したいのは、教員・指導者を目標とする学生だ。男女を問わず、教員・指導者が女性アスリートの身体的特徴をさらに理解して指導に生かせるようになれば、スポーツ界においては記録面でも指導の面でもより進化していくのではないだろうか。

運動生理学の分野では、男性を被験者としたデータが中心で、女性を対象とした研究はまだ少ないのが現状である。貢献性が高く、大いにチャレンジし甲斐のあるテーマであるということだ。前述したように、知識を活かしてサポートできる場は多様であり、多くの学生にぜひ門を叩いてほしい。栄養やトレーニングなどさまざまな分野との連携が必要な活動であり、団体大ならではの強みが活かせるだろう。

多くの学生に関心をもってもらうためにも、情報発信にいつそう力を入れていく必要がある。そして、それは学内だけでなく、卒業生の指導者の方々のネットワークを含めて、広く社会に訴えていくことが日体大の使命であろう。

月経など女性アスリート特有の課題に、セルフマネジメントの一つとしてしっかり向き合っていく。男性にはない、からだの変化に定期的に気づくサインをもっていることはアドバンテージなのだから。

女性として、指導者として 今後の人生で活かせる知識

最近、「女性アスリートサポートに取り組みたい」と考える受験生が出てきている。十代の

Next is us

日体魂の聖火リレー

～日体魂を受け継ぐ者～

02

河田 悠希

アーチェリー



的を狙うことそのものが楽しい。 自分流、自然体で、世界の高みを目指す。

——アーチェリーを始めたきっかけ

最初の出会いは小学校1年生のときです。生まれ育った広島県廿日市のお祭りでは、佐伯国際アーチェリーランドがアーチェリーのコーナーを出店していて、そこで初めて体験しました。それがとても楽しく、以来アーチェリーに夢中になったのです。佐伯国際アーチェリーランドは中国・四国地方で唯一、フィールドを歩きながらできる本格的なアーチェリー場で、こうした施設が身近にあったことは運命的でした。そして、小学校5年のころからアーチェリーを単なる遊びではなく、スポーツとして意識するようになりました。6年生のときにはインドアで18メートル先の的に当てる全国大会に参加し、それからは本格的にアーチェリーを競技としてとらえ、打ち込むようになりました。

——アーチェリーがすべて

オンもオフもアーチェリーのことばかり考えています。趣味はアーチェリー、特技はアーチェリー、好きなことはアーチェリーと、自信をもって断言できます(笑)。アスリートですから競技としてももちろん真摯に取り組んでいます。真面目、競技ひとすじというより、アーチェリーが身近にあることが私にとって一番自然なのです。放った矢が的の中心に当たると純粋に嬉しいですが、その以上に矢を打つことそのものが楽しいと感じます。走ったり、投げたりすることと違って、弓を持って矢を打つという行為は非日常的で新鮮ですから。その気持ちは私の原点とも言えます。

——ひたむきに打ち込み高みを目指す

オリンピックを意識しはじめたのは小学校6年生のときです。全国大会で、予選では1位だったのが、決勝で負けて2位になって、それがと

ても悔しくて、もっと上を目指したいと思うようになりました。上に、上にと考えていくと、頂上は当然オリンピックです。ただ貪欲にというより、アーチェリーの楽しさを実感しつつ、技術を高めていくというのがやはり私にあったスタイルではないかと思っています。高校2年のとき、全日本ターゲットアーチェリー選手権大会という社会人も参加する大会で優勝しました。この大会はナショナルチームの選考につながる大事な大会です。しかし、気負い過ぎず、予選から一つひとつのトーナメントで選考の基準を超えることを真剣に考えて臨んだ結果、優勝できたのだと思います。次第に、アーチェリーの楽しさに加えて、勝つ喜びも強く感じるようになりました。

もちろん、いまは東京オリンピックに出場するのが大前提です。そして、金メダルを取ることで、夢であり、目標です。そのためにはやはり練習しがありません。

——大学で新しい発見が多くあった。

もつとつまくなりたい。その思いに日体大は応えてくれました。大学に入って練習の量が増え、質が確実に上がりました。日体大は山本博先生もいらつしやいますし、世界大会に出ている人が多く、レベルが高いのでとても刺激になります。自分のスタイルを大切にしていますが、日体大で吸収したことを取り入れ、練習法を工夫しています。視野が広がり、日体大に入って本当によかったです。

大学での授業もとても役に立っています。体のことについていろいろ学べる上、アーチェリーに必要なことや生かせる知識が得られるのが嬉しいです。また競技力だけでなく、さまざまな経験ができるため人間的にも成長できるのではないかと思います。

◆プロフィール

河田悠希 (かわた・ゆうき)

体育学部2年、アーチェリー部所属。広島県立佐伯高校卒業。17歳のとき最年少で全国大会制覇。高校生でナショナルチーム入りを果たす。You tubeなど動画を見るのがリフレッシュ法の一つ。ただ、スポーツの動画を見るとつい、これはアーチェリーに生かせるといつもアーチェリーのことを考えてしまうという。趣味はアーチェリーだと断言。尊敬する人はウサイン・ボルトのようないつも結果を出している人で、自分もそうなりたいと考えている。

[Next is us 日体魂の聖火リレー]

◆君嶋選手からの質問に答えて

『試合や競技会にどういう思いや気持ちで臨んでいますか?』

試合であることを意識しすぎないようにしています。できるだけ自然体でいるように心がけています。日々同じことをしていけば、自然と結果は出ると信じています。

次号に登場するアスリートに向けて、河田選手からエールをいただきました。

◆河田選手からのエール

日体大はどんな競技も非常にレベルが高いと確信しています。そんな中でもお互いに刺激しあい、より高いレベルを目指しましょう。素晴らしい先輩が多いので、在学中も、卒業しても日体大生であることを誇りにしていきましょう。

河田選手から次号アスリートへ、リレー質問を展開していきます。ご期待ください。

——東京オリンピック・パラリンピックを オール日体大で盛り上げたい

私が2020年、東京オリンピック・パラリンピックを経験するときは、日体大を卒業しています。しかし、もちろん日体大の関係者には違いなく、私も含めて日体大関係者すべてで東京オリンピック・パラリンピックを盛り上げてい

将来は教員や指導者になりたいと考えているので、しっかり知識や経験を積み重ねていきたいです。

きたいと思っています。

日体大にはオリンピックで素晴らしい成績を残した方々が多くいます。卒業生の内村航平選手は毎回大きな大会やオリンピックに出てしっかり結果を出していて、本当に尊敬します。大きな大会で、また決勝という極限の状態であるにも関わらず、自分の力を出し、それを続けています。そういう選手の方々を見習って、毎回しっかり結果を出し、そして東京オリンピックで一番上を目指します。



水泳部
(水球)
荒木 健太

日本水球界初のメダル獲得!!



カヌー部
三島 廉

女子カヌーで日本人初のメダル獲得!!



ゴルフ部
河本 結

女子プロゴルフ界を盛り上げる存在になる!!



水泳部
(水球)
高田 充

世界の強豪国を倒しメダルを獲得



近代五種競技部
梅村 華苗

人の心を動かす選手になる



ゴルフ部
木村 円

人々を感動させるプレーをする。



水泳部
(水球)
川本 周磨

人々の心に残るプレーを!



水泳部
(バレー競泳)
富田 宇宙

自己ベストで金メダル、獲ります!



アーチェリー部
河田 悠希

歴史に残るような点数で優勝する。



水泳部
(競泳)
五十嵐 千尋

日本の自由形の底力を。女子セリでメダル!!



ラグビー部
堤 ほの花

沢山の希望を与えられるような選手になる



車椅子バスケットボール部
鳥海 連志

魅惑するプレーで金メダルを獲得!

0.001まで大切に! 点数より内容にこだわる!!

全試合一本勝ちで優勝

体操競技部
白井 健三

熱き日体魂を持つ日体大生に一言!

あなたはそのスポーツが好きですか、あなたにとって決めた目標は大事なことですか。どうしても成し遂げたいですか。本当に好きならば、本当に大事ならば、ちょっとしたことで挫けたりはしないよね。頑張れ日体大生!

学長 具志堅 幸司

柔道部
阿部 一二三

東京オリンピック・パラリンピックまで1000日

熱き日体魂の誓い 2020



質の高い演技。
攻めの演技で金メダル獲得!!
体操競技部 村上 菜愛



同時性を極めて美しく
舞い金メダルを獲得
新体操部 杉本 早裕吏

最高のパフォーマンスで金メダル!

レスリング部 樋口 黎

世界No.1プレイヤー!!

水泳部(水球) 足立 聖弥

表彰台の頂点で国歌を聴く

レスリング部 文田 健一郎



水泳部
(競泳・オープンウォーター)
森山 幸美

心から楽しめ、楽しませるレースをする☆



ラグビー部
高野 真希

当たり負けしない突破力のある選手になる!



バドミントン部
(パラバドミントン)
今井 大湧

誰かが負けたら必ず勝つ選手になる!!



山岳部
(スポーツクライミング)
是永 敬一郎

世界の舞台でメダルを取る



水泳部
(競泳・オープンウォーター)
野中 大暉

日本人初のメダル獲得!!



陸上競技部
(パラ陸上)
三須 穂乃香

日本に笑顔と感動をお届する走りをする!!



水泳部
(競泳・オープンウォーター)
綿貫 海斗

OWS 日本人初メダリスト!



山岳部
(スポーツクライミング)
波田 悠貴

記憶も記録も残せる選手になる



水泳部
(飛込)
岡島 太一

世界中に魅了される美しい演技をする



陸上競技部
(パラ陸上)
辻 沙絵

400mで金メダル獲得する



ラグビー部
清水 麻有

憧れの選手と言われるようなプレー



水泳部
(バレー競泳)
池 愛里

メダル争いにくい込む選手になる。

第29回ユニバーシアード競技大会で本学学生・関係者が健闘

平成29年8月19日～30日、チャイニーズ・タイペイの台北にて第29回ユニバーシアード競技大会が開催された。この大会に本学関係者62名が参加(選手33名、役員29名)。野球、競泳(女子 4x100mメドレーリレー)、柔道男子(団体)、体操男子(団体総合)で金メダルを獲得するなど、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて本学の存在感を示した。

【選手】

競 技	選 手 名	所 属・学 科	成 績
陸上	細田 あい	体育学科4年	女子10000m3位 女子5000m10位
競泳	武良 竜也	体育学科3年	男子100m平泳ぎ10位(準決勝敗退)
	野中 大暉	体育学科3年	男子10kmオープンウォーター8位
	五十嵐 千尋	体育学科4年	女子4x100m自由形リレー6位 女子4x200m自由形リレー3位 女子50m自由形 8位 女子400m自由形 10位(予選敗退) 女子4x100mメドレーリレー 1位
	長谷川 鼓	体育学科3年	女子200m自由形19位(予選敗退)
	森山 幸美	体育学科3年	女子1500m自由形7位 女子10kmオープンウォーター7位
	金子 喜恵	体育学科2年	女子100m/バタフライ28位(予選敗退) 女子200m/バタフライ10位(準決勝敗退)
水球	福島 文貴	東京ガスライフバル保谷	男子6位
	飯田 純士	東京ガスエスネット	男子6位
	荒井 陸	プラザハウス	男子6位
	吉田 拓馬	東京ガスクリエイティブ	男子6位
	足立 聖弥	体育学科4年	男子6位
	高田 充	体育学科4年	男子6位
	荒木 健太	体育学科4年	男子6位
	川本 周磨	体育学科3年	男子6位
	橋本 一輝	体育学科3年	男子6位
	伊達 清武	体育学科2年	男子6位
	コップ 晴紀	体育学科1年	男子6位
	細谷 香奈	CNCグループ関コスモネット	女子3位
サッカー	新澤 由貴	健康学科3年	女子3位
	山川 夏輝	体育学科4年	女子2位
	松永 早姫	社会体育学科4年	女子2位
	森田 有加里	体育学科3年	女子2位
バレーボール	山本 智大	JT東京	男子3位
	柴田 真果	FC	女子2位
体操	長谷川 智将	徳洲会体操クラブ	男子団体総合1位 男子種目別あん馬3位 男子種目別鉄棒8位
	神本 雄也	コナミスポーツ	男子団体総合1位
	笹田 夏実	体育学科4年	女子団体総合3位 女子個人総合5位 女子種目別平均台2位 女子種目別ゆか8位
	中村 有美香	体育学科2年	女子団体総合3位 女子種目別段違い平行棒8位
フェンシング	東 莉央	体育学科1年	女子フルーレ個人Round64敗退 女子フルーレ団体Round16敗退
柔道	藤原 崇太郎	武道教育学科1年	男子81kg級2回戦敗退 男子団体1位
バドミントン	玉手 勝輝	体育学科3年	男子ダブルス2位 混合団体2位 混合ダブルス予選敗退
野球	松本 航	体育学科3年	1位

赤字＝金メダル、紫字＝銀メダル、橙字＝銅メダル、緑字＝入賞(8位まで)

【役員】

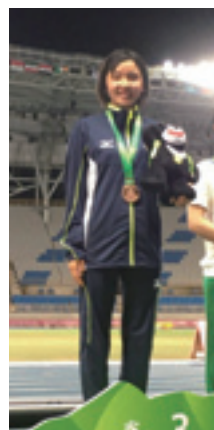
競 技	役 職	氏 名	所 属
本部	団長	塚原 光男	塚原体操センター
	本部員	室井 美香	JOC
陸上	コーチ	大後 栄治	神奈川大学
	コーチ	米田 勝朗	名城大学
飛込	帯同審判	松本 行夫	宇都宮市立横川中学校
水球	男子ヘッドコーチ	中嶋 崇光	日体大スポーツ専門職
	男子コーチ	塩田 義法	日本体育大学
	男子トレーナー	小菅 亨	日体大水球ブロックトレーナー
	女子コーチ	大井 恵滋	栄東高校
サッカー	女子コーチ	田代 久美子	山梨学院大学
テニス	監督	宮地 弘太郎	大阪体育大学
バレー	女子コーチ	根本 研	日本体育大学准教授
	技術スタッフ	平瀬戸 龍二	
体操	女子コーチ	大野 和邦	武庫川女子大学
	女子コーチ	瀬尾 京子	日本体育大学教授
	男子監督	陸川 章	東海大学
バスケットボール	女子アシスタントコーチ	木下 佳子	日本体育大学助教
	女子トレーナー	清水 結	とつか西口整形外科
ウエイトリフティング	コーチ	野澤 雄一	平成国際大学
	コーチ	加藤 智子	日体大ウエイトリフティング部女子監督
フェンシング	アディショナルスタッフ	小畑 直之	日本体育大学助教
	コーチ	織田 智恵子	日本フェンシング協会
バドミントン	チームリーダー	宮崎 重勝	神奈川大学
	コーチ	今井 紀夫	日本バドミントン協会
アーチェリー	トレーナー	神田 潤一	九州保健福祉大学
	チームリーダー	田中 伸周	JOC
野球	コーチ	樋口 彰紀	米子南高校
	トレーナー	佐々木 さはら	日本体育大学助教



体操男子団体総合(金) 神本雄也(一番左)・長谷川智将(左から二番目)



女子サッカー(銀) 山川夏輝・松永早姫・森田有加里



陸上女子10000m(銅)
細田あい



体操女子団体総合(銅)
中村有美香・笹田夏実

